be report

「備えない防災」って？

日常と非常の壁を越え、安全守る

「備えない防災」が、じわじわ広がろうとしている。東日本大震災が起きてから、もうすぐ10年。災害に備える大切さを誰もがかみしめたはずだったが、その後の地震や豪雨でも犠牲になる人は後を絶たず、災害時の混乱も繰り返されている。備えなくていいの？という疑問を解くカギは、フェーズフリーという考え方にある。

「まわりに防災をしなくてもいいと思っている人っています？」「命や生活を失っていいという人は？」

フェーズフリー協会（東京都）の佐藤唯行代表理事を訪ねると、こう質問された。「いないです」と答えると、記者自身の心構えを問われた。

「では、備えていますか？」「きょう寝るまでの間にすることを10挙げてください。首都直下地震が来たときのことは入りましたか？」

食料や水の備蓄はあっても、胸を張って「備えてます」と言える自信はない。頭のなかに常に地震のことがあるわけでもない。正直に伝えると、佐藤さんはこう言った。「防災を取材する記者でもそうなのに、『備えましょう』だけでは解決できません」

いくら備えの大切さを伝えても、必ずしも行動にはつながらない。この悩ましさは防災関係者からよく聞くし、メディアの立場でも実感する。人はなかなか、被災したときのことを想像できない。いつ来るかわからない災害より、目の前の生活に追われがちだ。

この壁をどうすれば越えられるか。防災の研究や事業に携わってきた佐藤さんが2014年にたどり着いた概念が「フェーズフリー」だ。フェーズとは状態や段階のこと。バリアフリーのように「日常時」「非常時」の境をなくし、対応力を高めることを目指す。

平時から役立ち「もしも」の時も

実現している製品はすでにある。例えば、大容量の蓄電池を積んだプラグインハイブリッド車は、停電時に電源になる。ふだんはそんな使い方は意識することなく、燃費がいい、環境にいい、といったメリットが得られる。

車が水没したときの脱出用ハンマーを兼ねたUSB充電器もその例だ。いつもは車のソケットに挿してスマホの充電に使い、もしものときは金属の突起で窓を割れる。専用品のハンマーには手が出なくても、充電器を買うときにこちらを選ぶ人もいるだろう。

平時から役に立ち、いつのまにか災害にも備えている。それが「備えない防災」というわけだ。「バリアフリーやユニバーサルデザイン、エコのように、フェーズフリーも当たり前になってほしい」と佐藤さんは言う。

防災用品は平時はしまわれ、余計なコストとみなされがち。売れるのも災害直後ばかりだった。フェーズフリーが価値になれば継続的なビジネスとして広がり、様々な場面で備えの厚みが増す。同協会は19年から認証制度を設け、取り組みを促している。

大手通販会社のアスクルは、19年からフェーズフリー商品をオフィス向けのカタログに集めている。目盛りつきの紙コップはふだんも使えるデザインで、災害時は粉ミルクの計量や炊き出しの調理に使える。ほかにベッドになる段ボール、懐中電灯になるデスクライト、ぬれても使える付箋やボールペンなど現在13商品。今月から、バケツになるバッグなど3商品も加わる。

「防災に手間やコストをかけられないお客様も多い。メーカーとともに持続可能性のある取り組みにしていきたい」と同社の西原利仁部長。

南海トラフ地震が想定される徳島県鳴門市は18年、地域防災計画にフェーズフリーを盛り込んだ。公共施設の設計やデザインに採り入れるほか、小中学校、幼稚園の教育でも取り組む。

例えば算数の授業で、津波の速さと走る速さを比べてみる。外国語では避難所で声をかける言葉を学ぶ。地域の防災に触れる機会を増やし、自然に意識できるようにする。教員の研修を進め、ガイドブックも作成した。

まちや建築でも広がる取り組み

取り組みは各地で広がる。東京都豊島区は、移動電源になる電気バスを池袋駅周辺で走らせている。愛媛県今治市のごみ処理施設は災害時も発電ができ、憩いの場と避難所を兼ねる。

山梨大の秦康範准教授（地域防災）は「日常に組み込む必要性は言われてきたが、しっくりする言葉がなかった。フェーズフリーはシンプルで普遍性があり、前向きに取り組める」と話す。

備えの大切さは変わらないが、違う視点でみると「こんな工夫ができるのでは」とアイデアも生まれてくる。コロナ禍という非日常に生かせる考え方でもある。

（編集委員・佐々木英輔）

グラフィック・伊坂 美友

◆次回の「be report」は「ともだちや絵本美術館」。毎月第1週は「北欧女子オーサの日本探検」です。